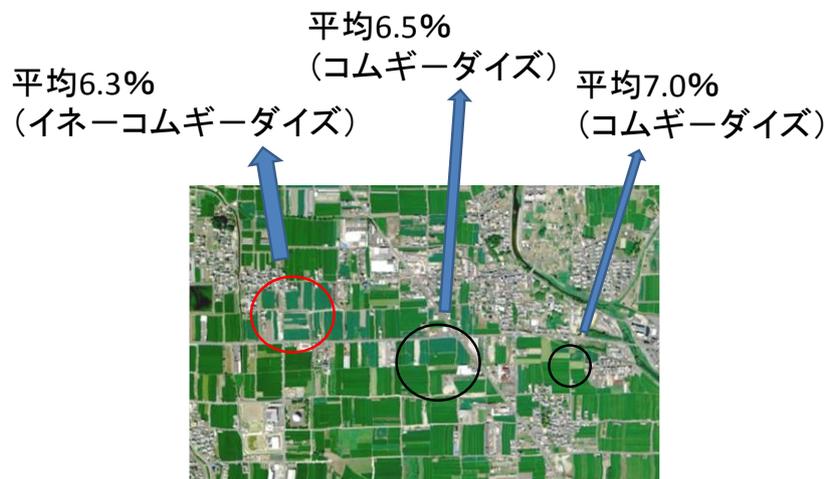


リモートセンシングによる生育診断技術と用途に合わせた大豆の収穫

京都大学大学院農学研究科
稲村達也・黒須暖加

主茎に依存する収量構成型の大豆においてタンパク質含有率がより高いことが明らかとされている。そして、単位面積あたり大豆の個体数(個体密度)が高いほど、子実収量の主茎依存がより高くなる。その結果、播種粒数や苗立ち率の変動による圃場内・圃場間における個体密度の空間変動は、収量ばかりでなく子実のタンパク質含有率の圃場内・圃場間の空間変動をもたらす一因となる。リモートセンシング等により生育中の個体密度の変動を把握することで、収穫時の子実タンパク質含有率の圃場内・圃場間変動を推定することが可能となる。このリモートセンシング情報の活用により、区分収穫された大豆を需要に応じて配合・出荷すること、および個体密度の変動要因の解明とその変動是正に基づく均一で高い個体密度の実現によるさらに安定した品質と供給量の確保が可能になると考える。本日の話題は、次の4点である。

1. リモートセンシングによる個体密度の推定
2. 個体密度の空間依存性
3. 生育期と成熟期における個体密度の関係
4. 個体密度とタンパク含有率との関係



ダイズ子実の窒素濃度(%)は地域内で変動している